マレー・コミュニティにおける家族・子ども・教育

金子 奈央

1. はじめに

本稿は、1950年から1957年に『カラム』誌に掲載された「千一問」(1001 masalah)の記事を主に取り上げ、その他の関連記事も参照しながら、この時期にマレー・コミュニティが家族、子ども、教育といった身近な話題に対してどのような疑問や関心を持っていたのかについて整理する。1950年から1957年という時期は、マラヤ連邦が国家として独立を達成するまでの時期である。独立を目前に控え、自らを取り巻く社会における様々な変化を直に感じていたマレー・ムスリムは、家族という自らが属する最も身近な集団にどのような役割を求めていたのか。また、マレー・コミュニティの未来を担う子どもたちの現状にどのような問題意識を持ち、家庭や学校といった場で子どもたちをどのように育て、教育しようとしていたのか。これらの点について、読者から寄せられた様々な相談にイスラムの立場から答えた連載コラム「千一問」および関連記事を用いて考えてみたい。

2.「家族」をもつこと／「家族」とは

本節では、この時期の「千一問」の記事中で家族に関連するものを抽出し、その内容を紹介する。

女性の結婚適齢期[*Qalam* 1951.2: 40]

【質問】

女性が結婚に適しているのはいつか。

【答え】

イスラムの教えに従えば、女性が結婚できる年齢は月経が始まったらということになる。私の意見は、その女性が妻としての責任を十分に理解できるようになったときが適齢期だと考える。

男性の結婚適齢期 [*Qalam* 1951.6: 16]

【質問】

男性にとって結婚に適しているのはいつか。

【答え】

それを判断するのは難しいが、社会の意見に従えば、20代になったら結婚に適していると考えられる。25歳以上で結婚するのがより良いと考えられるが、結婚という縁は神によって与えられるものである。進んで結婚したいという気持ちが芽生え、活力も十分にあり、努力することができるときこそが結婚に対する縁が訪れたときである。

女性の結婚や離婚に、年齢の制限はあるか [*Qalam* 1951.5: 37]

【質問】

40歳を過ぎて閉経した女性が結婚や離婚をすることは可能か。

【答え】

可能である。

姉さん女房を得ること[*Qalam* 1951.3: 16]

【質問】

年上の女性を妻として迎えてもよいか。

【答え】

年上の女性を妻とするか年下の女性を妻とするかは、各自の気持ちしだいである。しかし、実際には、妻としたいと思える魅力のある人物とは、(年齢ではなく)信心深く、礼儀正し差に満ち溢れている女性である。

来世の伴侶[*Qalam* 1951.3: 17]

【質問】

夫に先立たれた女性が再婚し、(再婚した男性と)生涯添い遂げた。来世ではどちらの男性がこの女性の夫となるのか。

【答え】

この女性が亡くなる際に一緒にいた方の男性(二番目

の夫）が来世の夫となる。

家族計画［*Qalam* 1951.12: 41］

【質問】

私には、12人の子どもがいる。私は子どもをこれ以上（あまり）増やさないようにしたいと考えている。産児制限や、（産児制限による）家族計画といった考えに従ってもよいか。

【答え】

この質問に答える前に、産児制限や家族計画の目的について知る必要がある。我々が読んだニュースの記事によれば、その主要な目的は、どんどん増加する人口に応じて、より広大な土地、より多くの食料が必要となっているから（その問題に対処するため）と考える。宗教団体からの強い反対がなければ、この政策は法制化されるであろう。また、多くの子どもを持つことは、それに伴う多くの責務を負うことを意味する。彼らに十分な教育を与えることができなければ、社会で役に立つ人材となることができなくなる。子どもに十分な教育を与えることは大変であるため、子どもの数を抑えることが求められている。イスラムの教義に従えば、子どもは神からの授かりものであり、それを人間がどうにかすることはできない。

人工授精は可能か［*Qalam* 1951.2: 40］

【質問】

子どもを持つことを切望している女性がいて、夫の同意があれば、夫でない男性の精子を注射などの方法で、その女性の子宮に注入し、妊娠し、出産するとすると、それはどのような報いを受けることになるのか。また、そのような方法で生まれた子どもにはどのような報いがあるか。

【答え】

そのような方法で子どもを授かることはできない。精子は卵子と受精させなければいけないが、精子は子宮に注入するだけでは受精しない。従って、そのような方法ではいかなる成果もない。子どもがそのような方法によって生まれる可能性はないが、（万一に）その方法で生まれた子どもは、不貞の結果生まれた子どもとなる。

不貞行為でできた婚外子について
［*Qalam* 1951.5: 37］

【質問】

適切ではない方法（不貞行為）で得た子どもは、どのような報いを受けるのか。

【答え】

その子どもは、不貞の結果として生まれた子どもであるが、その責任は、（生物学上の）母と父であり、不貞行為を行った当事者二人にある。

婚外子の将来［*Qalam* 1951.3: 16］

【質問】

不貞行為の結果生まれた子どもが大変信仰深い人間となった。この人物は、この信心深さ故に来世で成功することができるのか。

【答え】

神は「人は他人の罪を背負うことはない」と言っている。不貞を犯したのは彼の（生物学上の）父と母であり、その罪に対する責任は、不貞行為を行った当事者が負うべきものである。その子どもは父と母の不貞行為に対する罪を負うことはない。子どもは、彼自身の行いに応じた報いを神から与えられるだろう（良い人間であれば良い報いが、悪い人間であれば悪い報いが）。良いことが起きても悪いことが起きても、彼自身の行いに起因するものである。

両親の行いが間違っていた場合の子どもの対処方法

【質問】

もし、自分の両親の教えや行いが間違っていたら、子どもが強くその間違いを叱責してもよいか。イスラムの教義上、間違っているか。

【答え】

もし両親が間違っていたら、やわらかくその間違いを指摘するのがよい。イスラムは、自分の親を（叩くなど）強く叱り付けることを禁止している。両親は敬わなくてはならない。生まれたときから我々は両親から大切に育てられてきており、従って、両親に対して厳しい態度をとってはいけない。もし、両親が乱暴な言葉を自分に投げかけそうなときは、彼らの怒りが静まるまで近寄らないようにするとよい。

以上のように、家族に関連する記事の中でも、家庭をもつこと、すなわち結婚することや子どもを産むことに関する質問が多くみられた。これらの質問に関連することは、イスラムの教義上、正しい家庭を築くことに基づいた質問内容ということである。イスラムを信仰するものとして「正しい」「あるべき」家庭を築くためには、どの時期に、どのような方法で、どのような

相手と結婚し、どのような方法で子どもを授かることが「正しい」のかについて、「千一問」に投稿して質問することで理解してしようとしていたことが見受けられる。また、家族になった後に関する質問もあり、家族を構成する親と子がどのような関係を築くことがイスラム的に正しいかについても、記事に掲載された質問に答えるという形で主張されている。

3.「子ども」を育てる

『カラム』の「千一問」以外の記事では、子どもについて「この世に生まれた時点では、善でも悪でもない純な状態で生まれ、その後の成長の過程で善や悪を身につける」という立場［*Qalam* 1962.9: 30–34］や、「生まれた時は清らかで正しい状態にあるが、その後の成長過程で正しい道から逸れてしまうことがある」とする立場が［*Qalam* 1953.4: 40–44］述べられている。どちらの記事も、もともと「善」または「純」（善にも悪にも染まっていない状態）であった子どもたちを、正しい方向に導くのも悪い方向へと進ませてしまうのも両親による家庭教育であるとしている。特に、子どもとともに過ごす時間が長い母親の役割を重要視している［*Qalam* 1953.4: 40–44; 1957.5: 44–45］。

当時、子どもの躾に対して責任感のない親がいることが問題視されており［*Qalam* 1953.4: 40–44］、イスラムの規範に基づき、子どもを善良な道徳心を持った正しい人間へと育てるのは家庭で両親の手によってなされるべきであると主張されている。その方法は、子どもの成長段階に応じて使い分けるべきであるとされる。幼い頃は「褒美」や「恐怖」を与えることで善悪を教えることもあり得るが、成長段階が進むにつれて、子どもが良心に基づき自ら考えて善悪の分別を判断できる力を見つけるべきだと説明する［*Qalam* 1953.4: 40–44］。両親は、子どもが自らの良心で善悪の分別ができるようになるよう躾を行わなくてはならない。万が一、子どもが正しい道から逸れた人間となってしまった場合は、両親による家庭教育に問題があったからだと主張している［*Qalam* 1953.4: 40–44］。

同時期の「千一問」でも子どもを育てることに関連した親子の関係についての質問が掲載されている。これらの記事に共通している点は、子どもが結果として親の望む通りの人間に成長しなかった際の要因をどこに求めるかというところにある。この節でまとめたように、『カラム』の記事においては、子どもが万が一「正しい道」から逸れた人間になってしまう（親の望まない方向に向かってしまう）ことになったとしたら、親の家庭教育に問題があったとするものが大半である。

ただし、以下にあげる「千一問」の質問の前半では、「イスラムに関する基礎も体得できていないのは子ども本人の責任」としている。「努力できない人間に成長してしまった」、つまり「あるべき道から逸れた人間になってしまった」ことも含めて、親の家庭教育ではなく子ども自身の問題としている点は、『カラム』の多くの記事で展開されている主張とはやや異なっている。

出来が悪いのは誰の責任か［*Qalam* 1957.8: 19］

【質問】

両親は幼いころから子どもを養育し、学齢期となった子どもは学校またはポンドックでイスラム教育を受け、その子どもの父親は教育費を払い続けた。その後、学業を修了して家に戻ってきた際に、その子どもは預言者ムハンマドの生誕を祝う朗唱をすることさえもできなかった。これは誰の責任か。

【答え】

子ども自身の問題である。彼が勤勉にイスラムについて学ぶことを怠ったことが原因である。

父と母がすすめる結婚を断ることはいけないことか［*Qalam* 1952.9: 13］

【質問】

父と母が自分の娘に好きではない男性と結婚することを強いているとする。この件について、イスラムの教義上、強制的な結婚はないとあった。この娘が結婚を拒否した場合、この娘は不実とされるのか。

【答え】

神は「父と母を敬いなさい」と言っている。両親に対して嫌悪感をあらわす言葉遣いをしたり、乱暴な言葉を投げかけたりしてはいけない。礼儀正しい言葉遣いをしなくてはならない。両親に敬愛の意を示すことは、神に敬愛を示すことにもなる。両親に怒りを示すことは、神に怒りを示すことになる。ハディースには、「子どもに対する大きな権限を持っているのは母親である」「天国は母の足元にある」と言っているものもある。両親に対する愛情を大事にし、それを絶えさせてはいけない。もしあなたが両親への愛情を絶えさせてしまったら、間違いなく神はあなたに光をふり注ぐことをやめるであろう。子どもは、両親の言いつけや要望に忠実に従わなくてはならないと多くのハディー

スが言っており、忠実に守った子どもは現世や来世で幸福を手に入れるだろう。また、イスラムを信仰することは、父と母の要望に従うということである。別の宗教への改宗や、神に背くことを（父と母が）すすめたときは、その望みには従う必要はないが、それ以外の要望については従うべきだ。信仰深い父と母であれば、自分の子どもが不幸になるようなことや、子どもが心を痛めるようなことは見過ごさないであろう。従って、自分たちが選んだ相手と結婚してほしいという父と母の願いは、子どもの安全を確認した上でのことなので、適切だろう。また、子どもの同意を得ないまま結婚させることはないだろう。なぜならば、同意があって初めて結婚は成立するからだ。強制結婚が起こらないようにするためには、父または子どもの良識に基づくべきである。父は、子どもの心を傷つけるような要望をしてはならない。両親の配慮に欠ける対応が子どもの両親に対する不実な行いに繋がるかもしれない。従って、子どもが両親の言うことに従わず、不実になるのは両親の教育に原因がある。

4.「教育」に求められること

マラヤが近代的な国家として独立するにあたり、マレー人の社会経済的上昇のためには教育水準の向上が必要であると考えられた。このような問題意識に従い、マレー人に対し公教育の機会拡大が目指され、それを達成するための施策を講じることが求められた。その一方で、国家の発展に資する公教育は、西洋近代的な世俗教育的特徴を持つものであり、この拡大や普及を危惧する考えも、当時のマレー・コミュニティの中にあった。これは、伝統的イスラム教育の軽視や、それに伴うマレー・コミュニティの道徳観念の揺らぎや乱れに対する危機感である。

『カラム』の記事の中でも、当時のマレー・コミュニティにおける道徳心や信仰心の低下や風紀の乱れが問題視されており、その要因として、西洋的価値観を好む一方でイスラム教育を軽視していることを挙げている［*Qalam* 1955.9: 30–31］。このような社会の変化を好ましく思わず、マレー・コミュニティはイスラムを基盤として形成されているため、自分たちに真の発展をもたらす自律した精神を持つ人材を育成するために必要なのはイスラム教育であるという主張が展開された［*Qalam* 1955.9: 30–31; 1956.12: 20–22］。

成熟した道徳観念を育てるのはイスラム教育の役割であると主張されるが、それを担う場として、『カラム』では二つの方向性が示されている。一つ目は、イスラム教育の場として適切なのは家庭であり、子どもたちを取り巻く地域コミュニティであるとする立場である［*Qalam* 1953.4: 40–44; 1957.5: 44–45; 1962.9: 30–34］。もう一つは、イスラム教育は公的な枠組みの中で生きるべきであると考える立場である［金子2011］。国民国家として生きていかなくてはならない以上、その枠組みに沿った形で、イスラム教育も柔軟に変化しながら、その役割を果たしていくべきとしている。

都会のマレー人の子どもたちの学力の低さについて［*Qalam* 1951.8: 41］

【質問】

なぜ都会のマレー人の子どもたちは学業で成功をおさめることができないのか。

【答え】

全てのマレー人の子どもがそうであるわけではないが、多くの子どもが中等学校段階になるとあまり好成績がとれなくなるのは確かだろう。この原因としては、彼らを怠けさせたり、勉学から彼らを遠ざけてしまう多様な誘惑に遭遇することが多いことが考えられる。このような誘惑は彼らをとても奔放にする。父や母から何かを制限されることがなく、このような環境が学齢期の子どもたちに与えられれば、よほど強い精神力がない限り、子どもたちは自由奔放な状況に甘んじてしまうだろう。

英語の勉強のためにミッションスクールに通ってもよいか［*Qalam* 1951.4: 27］

【質問】

私は英語学校に通いたいが、私が毎朝（キリスト教式の）礼拝をしないことを教員が認めてくれない。英語を勉強するために、（キリスト教式の）祈りをささげたふりをするのは許されないか。

【答え】

アッラー以外に祈りをささげることは許されない。英語を教えることができる人は他にもいるが、アッラーは唯一無二の存在である。イスラム以外の宗教の方法で祈りをささげることは、イスラムの本質を壊してしまうことになる。従って、英語教育を受けることのできる別の場所を探すことをすすめる。

「千一問」では以上のように教育に関連する質問が掲載されている。この時期、独立を前にして、マレー人の

社会経済的な立ち遅れと、教育において他民族と比して劣勢である状況は、マレー・コミュニティにおいて大きな問題であった。この状況に対する問題意識がこのような質問として表れたのだろう。

都会のマレー人の若者たちの学業成績が芳しくない状況を憂いでいる質問については、学力そのものの問題というより、彼らがおかれている環境に問題があると回答側は考えている。都会には、若者にとって多くの誘惑（行き過ぎた自由など）が、そこかしこに転がっている。まだ精神的にも成熟しきっていない若者がこのような誘惑に遭遇しながら、それを全て回避するのは難しいだろうと同意している。その中で、「親からの制限がなければ」とも言及している。都会のマレー人の若者が直面する問題は、「親が制限をかけず自由すぎる環境を子どもたちが享受している」ことが原因の一つとしてあると考えられている。

二番目の質問は、マレー人の社会経済的上昇の手段として可能性としての英語教育と宗教教育の関係に関するものである。上で述べた通り、当時は、自らの社会上昇の手段として西洋近代的な公教育を重視するあまり、イスラム教育の影響力が低下していた。ただし、イスラム教育を重んじないことは、マレー人の若者たちに道徳意識の低下をもたらしたと問題視されていた。公教育が国家や自らを発展させる「生きるための手段」を学ぶ場であるのに対して、イスラム教育は「いかに正しい人間として生きるか」を学ぶ場である。善良で道徳意識の高い人間となることが、結果として個人も国も安定や発展へ導くと考えられている。他の宗教の方法で神に祈りをささげることに対しては、教義上の間違いであると答える同時に、そのような発想（上昇や発展のために実利的な教育を重んじ、信仰や宗教教育を軽視すること）や現状に対しても、この質問に答えることを通して警鐘を鳴らしているのではないだろうか。

5. おわりに

本稿は、独立前の時期のマレー・コミュニティが家族、子ども、教育といった身近な話題に対してどのような疑問や関心を持っていたかについて、読者から寄せられた様々な相談にイスラムの立場から答えた連載コラム「千一問」および関連記事を用いて整理した。植民地統治期や独立前後に経験した社会の様々な変化に伴い、人びとの価値観や道徳観念も変化していった。その中で、最も身近な所属集団である家族をどのように形成することが正しい人生を送ることができるのかについて考えるための質問が多く「千一問」に寄せられた。

「正しい」人間を育てるのは家庭の責任であるという主張は、『カラム』の様々な記事で展開されている。「千一問」には、「子どもが親の望んだとおりの人間にならなかった場合の責任の所在」についての問いが寄せられた。イスラムでは両親を敬うことをとても重要にしているが、両親に対する敬意が欠けたり勤勉ではない子どもが成長したりするのは、そのように育てた親の責任であるとする答えがある一方で、怠けた子どもの責任と捉える主張も展開された。

子どもを「教育する」ことに関して、この時期、マレー人が社会的、経済的に上昇するためには十分な教育を受けることが重要であるが、同時に、マレー人の学業においての立ち遅れも問題として挙げられていた。マレー人だから学業の成功をおさめられないのではなく、彼らが置かれている環境が勤勉になることを阻んでいるのだと主張した。また、社会的、経済的な上昇には学校教育が重要となるが、その一方で「正しい」人間となるためのイスラム教育の重要性についても主張された。イスラムの教えに基づいた「正しい」人間としての道徳心や信仰心を持つことが、個人の人生においてもマラヤ国家の発展にとっても重要であるという考えが基盤となっていた。

参考文献

金子奈央 2010「公教育の近代化に対する二重の危機感――マレー・コミュニティにおける子どもの教育論から」山本博之編著『『カラム』の時代――マレー・イスラム世界の「近代」』（CIASディスカッションペーパー No.13）、pp.39-44。

金子奈央 2013「ザアバの教育論」坪井祐司・山本博之 編著『『カラム』の時代Ⅳ――マレー・ムスリムによる言論空間の形成』（CIASディスカッションペーパー No.32）、pp.28-35。

Roff, William R. 1967. *The Origins of Malay Nationalism*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.

Rosnani Hashim. 2004. *Educational Dualism in Malaysia: Implication for Theory and Practice*. Kuala Lumpur: The Other Press.

山本博之 2002「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』第20号、pp.259-343。